



TITLE:

北樺太[採]集[記](下の三)

AUTHOR(S):

玉貫, 光一

CITATION:

玉貫, 光一. 北樺太[採]集[記](下の三). 地球 1927, 7(6): 470-476

ISSUE DATE:

1927-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183278>

RIGHT:

北樺太採集記 (下の三)

ヌイオ點影

玉貫光一

八月十一日 四時に起きてヌイオに向ふ。降りさうな空模様だ。例に依つて舟の底に軍隊の毛布を敷いて仰向けに寝そべつてギリヤークの哀調を帯びた小唄を聞き乍らすつかり舟に身を任せて下る。動物班の水鳥を打つ銃聲が時々静かな空気を破る。アザランが顔を出す。ギリヤークが叫ぶ。河は洋々として對岸のハイマツが時々光る。間もなく舟はひとまづヌイオの二里半程手前に唯一軒淋しく暮してある金鳳梨と云ふ朝鮮人の家へ泊つて晝食を採つた。主人は鼻下に立派な鬚を蓄へた三十五六歳の立派な人、露國婦人を娶り、妻の母と其他で六人暮して、畜犬、豚、家鴨等を飼つて約まじやかに暮してゐる。ツイミ河を上下する我等日本人の爲めに常に親切に世話をしてゐる愛すべき一家なのである。午後二時半最後の調査地であるヌイオの棧橋へ着いたのである。

この夜は明日の活動に具へる爲めの採集用具を整理したり久し振りで故郷への音信を認めたりして、ツイミ河の舟行後始めての安息を得て、靜かに明日の活動を待った。我等の宿である此のヌイオの兵舎は、ルイコフや其他の駐屯隊の様立派な露風な建物から出来てゐるのではない。昨年の火災の爲めに消失したので今は全くの穴居生活を餘儀なくしてゐ

るのである。棧橋から數間離れた所に長方形の長い屋根ばかりの家こそは此の一個中隊の守備隊の兵舎なのである。暑氣に堪ゆる爲めの設備の全く不用な此地では、一見如何にも暑苦しい穴居的な家屋こそは全く氣候に適した建築なのである。穴居の屋根からは數本の煙突が出てゐて、眞夏の八月に暖を採る爲めに焚くストーブの煙が暗いツイミの河面にただよふのである。今は山形の聯隊が駐屯してゐて、隊長の某大尉を中心に毎日の様に暗い中から裏の廣場で勇ましい練兵をしてゐる。隊には慕籠がある。菓子屋出の兵隊が毎日酒保で饅頭を作つて食はせる。全く糖分から見放された我々は酒保の饅頭を買占めして掛りのS曹長を驚かした。我々の部屋は廣い下士室で、隣りの兵士の大ホールからお國自慢のおぼこ節の哀傷的なメロデーが流れて来る。黄色なランプの灯を頼りに私は久しく當らなかつた顔を剃つてベッドに入つた。今夜は全くの安息である。

八月十二日、晴。兵舎の附近一帯はツンドラ地帯でも比較的に乾燥してゐる小灌木地帯である。従つて其附近は植物の分布狀態も聊か異つてゐる様だ。織形科や石楠科の植物が一面に咲き亂れてゐる此の廣野には高らかに生瓶の歌を奏でつ

つ花蜜の中に埋まる非常に多くの嗜花性の昆虫を見る。殊にアサノハナノミやアオハナカミキリ等の甲蟲やマルハナバチの類が一本の花に黒くなつて蟠集してゐる。

稍々早く晝食を採つて一行は北辰會と名付けられた日本の大きな諸財團からなつてゐる北樺太の石油や石炭等の利權を



×イオ守備隊附近の景觀

獲得する爲めに聯合で組織せられてゐる一つの團隊の駆動機船に便乗して約二里程下つた河口であるヨイオ海岸へ下る事になつた。船の下流に進むに従つて河幅は益々廣くなり、低いハイマツが繁つてゐる對岸は遙か彼方に見えてゐる。幅は拾町餘りもあらう。内地の河の概念では到底想像のつかない大陸的な光景である。甲板に立つて湖水の様な感のする廣い廣い河の景物は、名狀仕難い孤獨的な氣持ちを抱かせる。午後になつて特有の海霧が襲ふて來た。横波がひえびえと船腹を打つ。海岸近くなつて漸く我々の視野にオロッコの三角形の小屋が見えて來た。白布のテント式の家もある。馴鹿が四五匹蘚苔を食んでゐる姿も見える。唯一人長身の男子が岸に立つて我等の船を見送つてゐた。船は着いた。霧は遂に小雨に變つてしまつた。

海岸には驛舎があつて、ヨイオ中隊から順番に三、四名の兵士が來て泊つてゐる。宿舍で休んでゐる間に小雨も晴れたので一緒に來てくれた憲兵隊の人と中隊長K君等と一緒に採集を兼ねて二、三軒よりない露人の家へ視察に行く。憲兵隊の人は機會のある度に此處を訪問して、色々の事情を調査して行くのである。私の訪れた家はモフローフカ?、ともう一人の男との二人所帯の家であつた。彼等は附近のギリヤーク部落を相手に雜貨を商つてゐる五十過ぎの男であるが、若い時にモスコで強盜強姦をなして此處に流されたものである。露語の出来るK憲兵が我等の來意を告げると、彼等はパンや、紅茶やブランドー等を出して非常な歓迎をしてくれた

私は兵憲兵を通じて故郷へ歸り度くないかと聞いて見たが、彼等は此の無人の境を死地とするのだと答へる。そして我等の神はどこにでも君臨するのだと云ひ乍ら自信のある笑を浮べた。私達は彼等の心からの歓迎に感謝しつつ家を出た。そして九軒程ある海岸ギリヤークの部落へ向つた。

此のギリヤークの村落は河口から約二十町位南に寄つた砂丘に淋しく列んでゐて、此處の彼等は比較的ブリミチアな生活様式を存してゐる相である。アダツイミ附近の彼等よりも遙に物質的の觀念がなく、我々は小刀とか、採集用の酒精とか、煙草とか云ふ様な日用品を以て彼等の土俗品とを容易に交換する事が出来る。そして彼等は又我々の日用品は我々にとつては非常に大切な貨幣よりもその方を嬉ぶのであつた。女の耳飾や、匙や、網針や小桶等の彼等の必需品は勿ち我々の小刀やボタン等の極めて使用價値の低いものと容易に取換へられたのであつた。此の部落の長の家には簡単に造つた小屋に二歳位の小熊が倒はれてゐる。來年は此の部落で盛んに熊祭が行はれるさうである。此の附近の海岸にはアザラシが無數に生棲してゐる爲め、彼等の幼稚な捕獲法に依つても容易に捕る事が出来るので、此の自然的な條件が彼等を此處に住ましめたとも云へられる。

見渡す限りゆるやかな白砂の汀が無限に續き所々に二、三本のケルムホルツの形態をなしたグイマツや、其他の高地性の針葉樹の黒い姿が暗く海に面して立つてゐる他にはさへざるものとなない、海底は非常に浅い爲めに打ち寄せる波浪は

非常に高く、その引いた跡にはほんの僅かの極地性の海草が残つてゐるに過ぎない暗鬱なオホツク海岸である。

此の海岸には非常に多數のシロカモメ *Larus glaucus* Fabr が群棲してゐる事が特に目立つ。其他にシギの類が浪の引いた汀に下りてゐて餌をあさつてゐる。動物の工氏が銃を向けても一向に飛び立たうともしないで次から次と彈たれて行く一帯に北樺太のオホツク海に面した東海岸は地形學上から觀て面白い形態を具へてゐる。船に乗つて樺太の海岸線を旅行した者は誰しも感ずるのであるが、北進するに従つて其陸地が底くなり、陸の遙かに山が聳えてゐて、決して海岸近くにならずに見出す事が出来ない事である。之は前編で少しく言つた様に所謂樺太の陸地は臺地性が非常に發達してゐるのである。何故に此の様な地形をなしてゐるか云ふと即ち海面沈下の現象であつて、之は學者に依れば洪積期の末から沖積期の初葉に亘つて海岸線金帯が二百米内外の著しい隆起があつたのであるが、漸次に沈降して現在見る様な一つのテラプランドを形成したのであらうとせられてゐる。又今我々の立つてゐるメイスキー灣から以北シュミット半島迄は甚だ南北に廣がつた大小無數の灣があつて其海岸線が極めて複雑してゐる。一見之等の大小の灣口がある爲めに地圖を繕ぐものは、非常に湊港としての價値がある様に思ふのである。本州地方の海洋學の概念から見ならば斯る想像も亦無理ならぬ觀察であるけれども宗谷海峡を涉つて一步サガレン地方へ入つたならば日本々土で育ぐまれた我々の自然科學的な凡ゆる

觀念は其特殊事情の爲めに破壊せられて行くのである。如何にも日本内地にあつては極めて一部のそれを除いては海岸線に變化があれば多く良港が形成せられて航路が開けてその海岸線の文化が發達する事は誤りのない事だ。併し前述の様に陸地が臺地性であると云ふ事實は我等に必ずその海洋も之と同様に日本本土のそれとは又趣が異ふであらうと云ふ事を思ひ出させる。

古い時代に隆起した海岸線は徐々に局部的に沈降して行くそして高地は岬や島になり、谷には海水が浸入して入江となる。この法則の結果として所謂沈溺谷が生れ我等の立つてゐるマイオ地方以北に甚だしく多い入江灣となるのである。樺太の沿岸一帯及び對岸沿海州の之等は總て同一の性質なのである。確かに古い時代の沈降期の初期には島や岬がたくさんあつて現在のそれよりも遙に起伏の多い海岸線を成して居たものであらうが波浪の浸蝕は土砂を洗い岩石を破壊して現在の様な平坦なものにしたものであらう。

この海浸は一帯に海岸平原を作る。即ちマイスキー灣以北は全部遠淺で、海岸から一〇軒位の所は僅々十尋内外の深度しかなく、その外方は急に四、五〇尋の深さを有してゐる。

そして或部分は入江灣(昔時谷であつた所)となり、或る部分は潟となつてゐる。その淺い所が干潮の場合には二、三尋の深さしかなくなるので極めて吃水の淺い船だけが入江灣の中でも例へばツイミ河の舊河口であつたと云ふ様な河蝕谷だけを選んで幸じて航行し得るに過ぎないのである。如斯狀態で

あるから地圖の上では立派な入江灣ではあるがそれが極めて淺く濠港を求める事は全く出來得ないのである。

又之等の地方には必ず沿岸洲が發達してゐる。沿岸洲は何故に出來るか云ふと海が遠淺である爲めに大きな浪は海岸迄來ないで沖合で碎け、其爲めに起つた海底の土砂の攪亂は一部は深所に運ばれ、一部は其遠淺の所へ運ばれて細長い洲になるのである。之が所々切れて干満の時の出入口となり、デルタが内側に形成せられて行く。

北樺太の東海岸には大小のラグーンの他に湖が海岸線に列んで多い。之は河の力が弱く、沿岸洲を破るだけの水力が無い爲めに海に完全に注ぐ事が出來なくて如斯湖水となるのである。反對に水力が洲を破る事が出來れば洲は開いて入江となるのである。

マイスキー灣を歩いた人は之等の湖が干潮の時には小舟さへ通へなくなつて舟人は人を下して舟を曳き乍ら無數に繁茂した海草の中を進むのを見るのである。

此地には軍政部の許可を得て北海道地方の漁業家が二、三夏期の間だけ出張して鮭や鱒を専門に漁業をしてゐる。我等は函館の土門氏の經營してゐる漁場で之等の捕獲法を見學して宿舎へ歸つた。

今日は風物を眺め、土人を視察したりしたので思ふ様な採集品はなかつた。いや採集すべき何物もない廣漠たる海岸ではあつた。

八月十三日。四時半に起床して徒歩で守備隊へ歸る事にす

る。朝の潮騒のする汀を南へ南へと進み、更にフレツプの一面に敷きつめた砂丘を過ぎて道は漸やく海岸から離れて灌木地帯の二十町程の植物景觀は我等採集旅行者に探つては砂漠の中のオアシスに出遇つた様な感觸を齎すものである。單調な海岸では我々は僅かに陰氣なバナカクシの一種と波に打ち上げられた死魚に寄生してゐたシテムシやカツチアシムシ等の不景氣なもので満足しなければならなかつたのだが、この同じ泥炭地の灌木地帯でもメイオ海岸宿舎から約一里程南下した海岸線から西に二十町程入り込んだ所は土地が比較的隆起してゐる關係が非常に乾燥してゐるので、多種類の泥炭地植物と原野性植物とが混茂してゐる。従つて非常に多くの昆蟲が生活してゐる。ハナウドや其他の繖形科の花にはハナムグリやハナカミキリ等の元氣な甲蟲やマルハナバチの類が集まりニツクワウシヤクナゲやクロマメノキ等の小さな灌木には今羽化したばかりらしい可憐な蠅しのかゝつたカラフトルリジジや多くのコヒヨウモシの類が輕やかにひらめいてゐる。私は幾度か、此の恵まれた乾燥した小灌木地帯の小徑で新しい採集品に嬉こび聲を挙げた事であつたらう。そしてもう影さへも無い一行を、驚ろいて輕やかに後を追ふた事であつたらう。

此の有望な採集地帯も間もなく無限の憂鬱なツンドラの中を流れる凡ゆる有機物を含み汚んだ赤錆びた流れを幾つか渡る頃は全く離れてしまふ。そこからは又ぬかるみの濕地が兵舎の十數町手前迄続くのである。この濕地帯には必らず我等

の期待に背かないツンドラ昆蟲が生活してゐるのだつたらうが、泥濘に悩まされた我等は一時も早く兵舎に歸ることを急いだので残念乍ら充分な採集をなす事を得なかつた。四五十間もある泥川に架せられた危険な針金の釣橋を渡り尙も泥濘の原を涉り漸く夕陽のツンドラの果に沈む頃兵舎に入る事が出来た。

約一週間の滞在に我々は守備隊を中心にして海岸地方の視察を始め、カタングリーの石油露頭の見物等をなした。

北緯太には南はレンスキ湯から北はシエミツト半島近くのオハ迄東海岸一帯に連續的に石油の露頭がある。之等の多くの油田から採れる石油は一般に揮發性分が少なく、機械油や重油に富んでゐるのである。

カタングリーの油田はメイオ守備隊から約四里位南下したカ



カタングリー石油探掘場

タングリー湖の附近にある。此の湖を中心にして流れてゐる小川の流域の所々に濃厚な原油を露出し、或者は硬くアスハルトに硬化してゐる。我々は湖から約一里程手前の試掘場のボーリングを見物した。グイマツ林を切り開いて数本の櫓を立てて試掘場には四、五人の眞鍮な技術家と十数人の人夫達が活動してゐる。一本の櫓を組立てるのに數萬圓の費用と數ヶ月の時間を要するのださうだが、地層を粉碎して立派な成績を修めれば兎に角だが、萬一不成功であれば之等の歲月と費用とな惜氣もなく極北のツンドラの中へ埋めてしまふのである。此の試掘場の人々の話に依れば湖附近の原油の露頭池には秋になれば鴨が下りて翌朝重油の粘液の爲めに翼が癒着して幾匹でも生捕りが出来ると云ふ嘘の様な事實を聞かされた。露頭は多く流れの近くにある關係上からかイハノガリヤス *Calamagrostis Villosa Nutt.* の純群落がある。そして針の様に延びてゐる葉の先端がドス黒い重油の爲めに染められてゐるのは如何に草とはいひ乍ら可愛想である。我々は此のイハノガリヤスとグイマツばかりのツンドラで始めてカラフトタカネヒカゲ *Oenais jutta Sachalinensis Mats.* (前出挿圖 *Jutta magna Heyne* と少しは誤る) の雌雄を採集する事が出来た。之は日本アルプスの一萬尺近くで採集せられるタカネヒカゲと稍々似てゐるが、開張がより以上廣く翅より黒いので直ちに見分けが付く。

兵舎からカタングリーの油田迄の間にはノーグリックとズイグリックの二つの石油礦床が存在してゐるが前者は一九〇

八年代に露人が二個の櫓を建てて試掘したさうであるが、現在では廢坑になり、僅かに鹽水とメタンと微少の石油とが自噴してゐるに過ぎない、後者は廣い露頭面を有してゐるさうだが未だ試掘せられて居ない。

一般に北樺太の石油礦床は東海一帯に分布せられてはゐるが、之が地質的従つて經濟的價值は未だ充分に研究せられる餘地があるらしい。

八月十六日は午前中は快晴で採集に絶好の日和であつた。午後からは雷鳴があり、玉の様な霰が降つて來た。樺太は夏期は非常に乾燥が激しいので雷雨等は一度も聞かない年があるさうだ。農民達は雷鳴のあつた歳は豊年であると云つて嬉こぶさうである。それにしても八月の霰には驚かされた。

十七日の朝七時半一週間の視察を了して一同は愈々歸途へ着いた。

我等は此の一週間の滞在に三日の夜間採集に多くの未記録種と豫測以上の新種とを採集する事を得た。その新種の主なものを列記すれば次の様である。

カラフトシモフリヒトウ *Anomogyra sachalinensis Mats.*

タメメキヒトウ *Anomogyra tamanukii Mats.*

ハイイロヒトウ *Anomogyra griseola Mats.*

エグリヒトウ *Aexcaeva Mats.*

トガリカラフトヒトウ *A. acuminata Mats.*

マメヒトウ *Polia pisi nytoronis Mats.*

オホタニヒトウ *Hypoxestia otatienis Mats.*

マイオチヤイロモトウ *H. nyivonis Mats.*

シタウスギンウハハ *Syngnapha nyivonis Mats.*

マイオナミシヤク *Cidaria nyivonis Mats.*

守備隊の兵舎の眞向の川の中程には晝尚ほ暗い程に繁つた湿交樹を懷いた周圍十町位の小島がある。混濁の流れに千古不伐の影を寫した姿はあの西歐の諸人ベックリンが寫した『死の島』を連想せしめる。私は暇が無くて遂に其の島を訪れて親しく其の景物に接する事が出来なかつたが、其處には此の地方の總ゆる植物が繁殖してゐるのではなからうかとも思へる位に多種類の草樹が繁茂してゐるのを對岸から目撃する事が出来た。私は此の小島に直而した河岸の高い所へ一千燭光の透蛾燈を三夜連續的に燈したのであつた。暗くなると間もなく元氣なヒトリガ *Arcia coja L.* が數匹飛來したのを手初めに二時過ぎ迄には夥だしい數の蛾類が毒壺に入れられた私達は此の北樺太へ渡つてから十數回の夜間採集を爲したのであるが此の時程多く採集し得た場所は一所もなかつた。それは確かに陰曆の無明の夜で時季もよかつた事にも依つたらうが、この限りなき植物の繁つた小島を對象とした事も重大な原因であつたと思ふ。此の數種の新種の他に此のマイオ以外では未だ本邦では何處でも採集せられてゐないカラフトドクガ *Dasychia fasciata L.* の二匹の雄を採集する事が出

來たのである。又たそれがれ時に飛來した多くのヒトリガを見ると開張が非常に小さくて班紋も亦多少變化してゐるものがある。この個體の小さく、且つ多い事は前に北樺太の各地で見たエプシロテフのそれと一致して昆蟲の發生上に及ぼす氣候の影響を語る面白い事實である。

晝の採集品で特記すべきは新種アカホシカミキリ *Oberca rufonaculata* Tamaki. を得た事である。これは本州や北海道に産するリンゴカミキリと似てゐるが、觸角の短い事と胸背板に赤い紋があることと翅鞘の先端の斷裁形の相異等で區別出来るものである。

兵舎附近のツンドラにはフレップくるまめの *Vaccinium uliginosum* が非常に分布してゐる。従つて之を最も好むミヤモモンキテフ *Colias palaeno sachalinensis Mats.* が、丁度内地のモンテフが居る位に多く飛んでゐた。此の種類は無論内地にあつては高山蝶で淺間山等で採集せられるものであるが、植物が變化してゐるとはいへども、之れが平地に多數にあるとは又面白い事である。

愈々マイオを去るべく土人の獨木舟上の人となつて此の島を眺めた時私達は此の未踏の島で晝の採集の出来得なかつた事を深く遺憾に思つたのであつた。